

ここに置かれている像と同じ大きさの《考える人》は、世界各地に21体もありますが、静岡県立美術館の《考える人》には、いくつか特徴があります。

1つめは、今までに一度も屋外で展示されたことがないことです。

雨や風に打たれていない美しい姿のこの像は、

ロダンが肉付けしたあとを生々しく見る事ができるのです。

2つめは、多くの《考える人》が高い台座の上に置かれているのに対し、

静岡県立美術館の《考える人》は低い台座にのせられていることです。

ですからここでは、たいへん近くから作品を細かく見る事ができるのです。

あなたは今までに、どこか別の場所で《考える人》を見たことはありませんか？

もし見たことがあれば、どこで見ましたか？思い出してみましょう。



〈参考〉ドイツ・ルネサンス時代の  
版画家デューラーの作品  
《メランコリアⅡ》(1514)

## 《考える人》とメランコリア

《考える人》のポーズに注意してみてください。

実はこのポーズから、作品の深い背景を読み取ることができるのです。

ほほのあたりに手を当ててももの思いにふけるこの姿は、“ゆううつ質(メランコリア)”をあらわすものとして西洋で伝統的に扱われてきたポーズだったのです。

ゆううつ質とは、孤独を愛し、自分の世界に閉じ込めて明るく活動的にふるまおうとしないタイプの人間の気質のことですが、西洋ではこのような人こそ、天から与えられた知性と創造力をあわせ持つ理想的な人間としての詩人や哲学者、芸術家であると考えられてきました。

ロダンの《考える人》像は、彼が影響を受けた「神曲」の作者である詩人ダンテを表現したものにほかならないともいわれています。

パリ近郊の町ムードンにはロダンのアトリエが美術館として残されています。  
その一角にあるロダンの墓の上には今なおロダンを見守り続けるかのように  
《考える人》が置かれています。

下のイラストの中に  
その《考える人》を  
スケッチしてみましょう。

